

第百九十一話 日本は侵略国だったのか？

盧溝橋事件を発端とする支那事変は、日米英蘭戦勃発に至るも解決を見ず、遂に日本のポツダム宣言受諾を受けて終了することとなった。この日支間の戦い(或る人は日中戦争と云うが・・・)を如何に評価すべきか、果たして、侵略戦争だったのか？日本は、細川首相の侵略戦争明言に続き、1995年8月15日の村山談話で先の大戦は侵略戦争であったと認めたとされ、その後の政府は基本的にそれを踏襲している。踏み絵ともなっているようだ。

世論調査でも、日本の支那大陸における行動は侵略であると認識する者が多い。しかし、史実を仔細に見れば事実は異なる。確かに、日本にも対応の不味さがあり、結果的に日本悪玉論が蔓延った。〈参考 世論調査結果〉 読売新聞「検証戦争責任Ⅰ」によれば、日中、日米戦争『ともに日本の侵略戦争だった』と『中国との戦争は侵略戦争だったが、アメリカとの戦争は侵略戦争ではなかった』がともに34%で拮抗しているという。対中戦については68%が侵略戦争と考えているという。

- 1 中国がいま尚、「日本の中国侵略と世界征服の陰謀」の共同謀議の証拠として利用し続ける所謂「田中上奏文」は偽書である。(第五話参照)
- 2 日本は盧溝橋事件(1937/7/7)以来、一貫して戦火の拡大を防止しようと努力してきた。その間に行われた軍事行動は、所謂一撃論に基づくものであって、軍事占領を企図したものではなく、侵略意図は毛頭なかった。(第三十六話、第百八十八話参照)
- 3 詳細は割愛するが、反日・悔日挑発事案の頻発、通州事件(1937/7/29)(通州事件：第六話参照)や大山中尉殺害事件その他に際して、日本の隠忍自重も限界に達し、「暴支膺懲」論が起きた。この日本の行動は、仮に過剰防衛ではあったとしても侵略行動と誰が非難できようか？
- 4 日本は様々な和平工作を行い、それが功を奏するかと思われる場合もあったが、頓挫するに至った。これらが結実しなかったのは、和平を望まない中国側勢力による妨害等であり、責任の大半は中国側にある。(第二十五話参照)
- 5 ソ連(コミンテルン)の暗躍により、抜けるに抜けられない状況に陥ったのであり、結果的に支那大陸内で武力行使したものである。決して意図的ではなかった。(国共合作抗日一致策、国民党軍と日本軍を戦わせて、双方を疲弊させ漁夫の利を得る策、国民党の分裂と和平の妨害工作等)
- 6 中支に戦火が拡大した第二次上海事変(1937/8/13)は、約三万人の居留民を保護するために、止むを得ず2個師団を派遣・反撃したものであり、正しく邦人保護のための自衛行動であった。(第七十九話参照)上海事変は、背信的独軍顧問の助言を受けた蒋介石軍約六万による計画的対日作戦であった。この事変により、日本は泥沼深く嵌まった。
- 7 欧米列強及びソ連(中ソ不可侵条約軍事秘密協定 1937/8/27)の支那への軍事援助或いは日支対立激化工作、西安事件(1936/12/12)による第二次国共合作が奏効して、日本は出口を塞がれた。蒋介石等の徹底的な国際宣伝戦に、日本は敗北した。
(第十話、第十一話、第五十話、第百二十三話参照)
- 8 日米交渉の肝は支那撤兵問題だったが、米国は日本に決して妥協をせず、追い詰めた米は、裏口参戦の機会を虎視眈々と狙っていた。出口なき戦いを強いられたのであって、決して侵略戦争ではなかった。
- 9 「侵略」の明確な定義はなく、自衛戦争との線引きは難しい。結果的に大陸の主要部分を占領(面積：伝統的中国本土の50%弱、住民数：全人口の4~5割)したとは言え、それは自衛戦の結果であって、侵略を目的としたものではなかった。弱者との戦い即ち侵略戦争だと言うべきではなかろう。

* もがき苦しむ日本の悲しき姿が浮き彫りになってくる。悲しい程だ。

(第百九十一話 了)